

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 1 日現在

機関番号：32404

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720203

研究課題名(和文) 待遇的観点から見た日本語あいさつ表現の研究

研究課題名(英文) Study of the Japanese greeting expressions judging from the point of view of the honorific

研究代表者

中西 太郎 (NAKANISHI, Taro)

明海大学・外国語学部・講師

研究者番号：30613666

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：従来の日本語あいさつ表現の地域差の研究は、典型的なあいさつ言葉を重視し、使用実態の解明が十分でなかった。そこで本研究は、いまだ実態解明が不十分な地域を対象に、上下・親疎、異なる相手によってどのような表現を用いるかといった運用を重視した使用実態の解明を行った。そして、その様々な地域の資料をもとに、日本語あいさつ表現が、あいさつの場面専用の表現である「あいさつ言葉」を作り出す「定型化」の方向で変化をしていることを明らかにした。さらに「定型化」も含む変化に関わる要因を洗い出し、あいさつ表現の変化の度合いを説明するあいさつ表現変化のモデルを構築した。

研究成果の概要(英文)：Previous studies on regional differences with Japanese greeting expressions focused on typical greeting expressions, and were not sufficient in uncovering actual conditions of use. With this in mind, this study uncovers actual conditions of use in regions where actual conditions were still unclear while focusing on use such as what type of expressions are used depending on levels of respect. Additionally, based on the actual conditions of use on various regions, it was uncovered that greeting expressions in Japanese are becoming formulated, creating greeting expressions which are expressions exclusive to greeting situations. Furthermore, factors involved with changes including formulation were uncovered, and a model was developed to explain the level of changes in greeting expressions.

研究分野：社会言語学

キーワード：あいさつ 待遇表現 方言 言語行動 地域差 コミュニケーション 定型表現 言語地理学

1. 研究開始当初の背景

従来の日本語のあいさつ表現の研究は、「おはようございます」や「こんにちは」のような典型的なあいさつ言葉を中心に、その定型性や典型的な使用場面に主たる関心が寄せられてきた。しかし、近年ではあいさつ表現の使用実態をもとにあいさつの本質的機能を検討する研究の必要性が唱えられ始めた(學燈社 1999『国文学解釈と教材の研究 特集 あいさつことばとコミュニケーション』44-6 ほか)。その意味で、あいさつの機能の一つとされる待遇的機能の重要性の検討が急務である。

一方、あいさつ表現の地域差を扱う研究でも、従来の単純な要素の地域差に目を向ける研究から、相手との上下関係や親疎関係といった待遇的観点での使用実態の地域差に目を向ける研究への展開が求められ、さらに、その使用実態をもとにした変化の動態の考察が期待されている(江端 2002 ほか)。

このような研究開始当初の背景の中、筆者はこれまで一貫して日本語あいさつ表現を対象に研究を行い、待遇的観点からの記述・考察の重要性を裏付ける、次のような研究成果を得てきた。

出合いのあいさつ表現が敬語に相当する待遇的機能を持つことを明らかにした。また、「ございます」「です」のような述語敬語形式の有無が、丁寧さの違いにつながることに加え、例えば、常体の表現同士でも、「おっす」と“呼びかける”か、「おつかれ」と“慰労する”かという、あいさつの表現内容の違いによって、丁寧さが異なることも明らかにした(中西 2008)。

を踏まえ、午後までの「おはようございます」の使用など、近年の特徴的なあいさつ表現の変化のいくつかは、待遇的に利便性のある表現を志向したがゆえに起きると考察し、あいさつ表現の変化のパターンの一つを明らかにした(中西 2008)。

東北地方や南九州地方など126地点で待遇的観点での記述を行い、その使用実態の地域差を明らかにした(中西 2009、2011)。様々な表現が用いられるとされてきた北東北地方と南九州地方であるが、北東北地方は、様々な表現のうち、有力に用いられる表現がないのに対し、南九州地方は、行先尋ねや調子伺いの表現等、いくつかの表現が有力に用いられるという、使用実態の違いが具体的に明らかになった(中西 2011)。

北東北地方や南九州地方の変化の動態について の資料をもとに考察し、近年、あいさつ表現変化の大局的な流れである「定型化」と、それとは流れを異にするような「待遇的側面目当ての変化」、それぞれ両方が起こっていることが新たに確認された。そして、その2つの大きな流れの関わり合いのもとで近年のあいさつ

表現の変化が起こるといふ、あいさつ表現変化のモデルの一つを示し得た(中西 2011)。

2. 研究の目的

上記の背景を踏まえて、本研究では、未だ実態解明が不十分な地域の使用実態を記述し、その資料をもとにあいさつ表現変化のモデルを構築することを目的とした。

なお、これまでにあいさつ表現の地域差として、a.定型的表現使用地域、及びb.非定型表現使用地域があることが明らかになっている。そこで、日本語あいさつ表現の変化のモデルの構築をするため、少なくとも、性格の異なるあいさつ表現を使用するa、bの地域から代表地域を選び、加えてc.定型非定型中間地域の使用実態も記述する。

総じて研究期間内に以下の ~ を明らかにすることを目的として設定した。

(1)あいさつ表現使用実態の解明

あいさつ表現使用実態の解明のため臨地面接調査を行う。a、b、c、それぞれの地域について代表地域を選び、待遇的観点での使用実態記述を行う。

(2)あいさつ表現変化の動態の考察

で記述した資料をもとに、年代差や地域差の観点であいさつ表現の変化の動態を明らかにする。

a、b、c、それぞれの地域で高年層・若年層の使用実態を調査する。それをもとにそれぞれの地域内部での年代差から見た変化の動態の考察を行う。

a、b、c、それぞれの地域の調査結果を踏まえ地理的動態の考察を行う。その際、地域内での都市/非都市での地域差や、全国的視点での、中央部:周辺部という観点での地域差に注目して変化の動態を考察する。

(3)あいさつ表現変化のモデルの構築

(2)、及びこれまでの研究成果をもとに、定型化や待遇的側面目当ての変化という言葉変化の内的要因、年代差や都市化の度合いの関わりという言語変化の外的要因、それぞれのあいさつ表現の変化への影響を整理し、あいさつ表現変化のモデルを構築する。

3. 研究の方法

本研究の目的であるあいさつ表現の待遇的観点での記述を推し進め、あいさつ表現の変化のモデルを構築するために、本研究では、実態調査を出発点にして主に以下の3つの取り組みを行った。

(1)あいさつ表現使用実態の解明

(1)では使用実態を明らかにする調査を行う。変化のモデル構築のために、具体的な対象地域として少なくともa定型的表現使用地

総じて、本研究で得た使用実態のデータは、先行研究（『方言資料叢刊』調査地点は図1中の青い）のあいさつ表現の使用実態記述の不足を大幅に補い、あいさつ表現の使用実態の地域差を記す貴重な基礎資料を収集することができたと言える。これは、待遇的側面を重視した使用実態記述の1モデルを示し、その方向での研究を促進する効果を持つとともに、例えば隣接分野では、日本語史におけるあいさつ表現の歴史を解明する研究などを助け、あいさつ表現の形成過程の解明といった発展的な研究の一助ともなり、その意味で、記述の意義が大きい資料を得たものと捉えられる。

(2) あいさつ表現変化の動態の考察の成果

(1)で得た資料をもとに行なった変化の動態に関する考察では、地理的動態の考察に重心を置き、全国的視点での比較と地域内での比較を行った。

年代差の考察の成果

当初は a、b、c、それぞれの地域内部での年代差の使用実態データを得る予定だったが、高年層の使用実態の記述を重視した結果、比較に耐える十分なデータを得るに至らなかった。限られたデータだが、a 定型的使用地域(兵庫県) c 定型非定型中間地域(宮城県沿岸部)については、高年層から若年層に向けて定型化していると推測できる。

地理的動態の考察の成果

全国的な視点での地理的動態の考察については、使用実態の資料をもとに判断すると、京都を中心とした中央地域に近づくほど定型的使用が使用され、地理的周縁部ほど、非定型表現が使用されるという使用実態が確認できたとともに、調査時期が先んじる先行研究の使用実態に比べ、定型的使用の浸透が進んでいるということが確認された。また、朝の出会いの場面だけでなく、日中の場面についても中央地域を中心とした伝播の様子が窺えることを明らかにした。つまり、本研究で調査した場面、地域については、大局的に見て、定型化の流れの中にあるといつてよいと思われる。

次に地域内での比較においては、各地の使用実態のデータをもとに都市/非都市の観点で、比較・検証を行った。これまでに明らかにした事実も含め、概ね、都市部ほど定型化が進んでいると判断できるが、南九州地方では、都市化が定型化を促す要因になっていると言いつてもいいという興味深い分析結果も得た。

これら全国的な視点での考察と地域内での比較に共通して興味深いのは、それらの例外的な動きが見られるのが、西日本の地域だということである。このような分析・考察から、あいさつ表現の定型化に抗する背景として、言語的発想法の地域差(小林・澤村 2014)という、様々なことばの地域差を生み出す概念が作用している、という着想を得るに至っ

た。

(3) あいさつ表現の変化モデルの構築の成果

(2)で得られた変化の動態の知見を総合し、次の図2のようなあいさつ表現変化のモデルを得た。

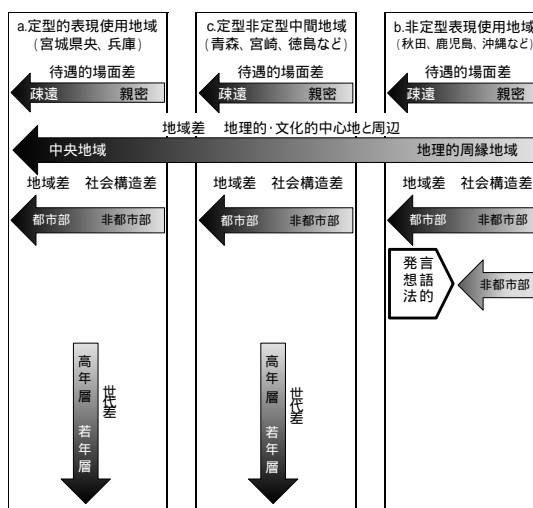


図2. あいさつ表現変化のモデル

図2中のそれぞれの矢印には、黒～白のグラデーションが施されているが、これは、本研究の研究結果から、矢印内に示される軸で、黒い極の方に近づくほど、「定型化」が進んでいるということを示している。なお、cの地域内の年代差は未着手であるため示していない。つまり、中心地域、都市部、若年層、疎遠な相手に対する場面ほど、定型化した表現の浸透が進んでいるということである。一方、このような見込みの下では、中央地域でも、非都市部、高年層、親しい相手に対しての場面であれば、定型化が進み切っていない使用実態を保持している可能性があるという、今までにない見方が示される。

また、b地域の地域差 社会構造差は上下2段の矢印で示しているが、これは、すべての地域が単純に一樣な方向で定型化に至るわけではなく、言語的発想法のような要因の影響を受けて多様な可能性があることを示している。

(4) 本研究の意義

本研究によって、あいさつ表現の使用実態の基礎的な記述から、待遇的観点から踏まえての変化の動態の考察まで、一貫したあいさつ表現の研究の基盤を確立できた。

そして、そのことにより、近年注目される、他の対人的配慮表現（「前置き表現」など）の研究にも、その変化の在り方を捉える研究方法の道筋を示すことができたものと考えられる。また、本研究により構築される「あいさつ表現変化のモデル」は、文献によってあいさつ表現の発達過程を解明する日本語史の手助けともなり、その方向での研究を活性化することにつながる。

(5)今後の展望

本研究では、あいさつ表現の使用実態について、性格の異なるあいさつ表現を使用する各地の代表地域の使用実態を記述してきた。だが、結果として使用実態のデータを得た地域は東日本に偏っており、その意味で、あいさつ表現変化のモデルも完全とは言えない。

また、本研究を進めていく中で明らかになった、定型化に抗する要因が働いていると目されるデータが、西日本のものであることも注目される。その点を考慮に入れば、今後、西日本の未解明の地域の使用実態を調査し、そのデータをもとに検証を行い、必要に応じて適宜修正し、本研究により得られたあいさつ表現変化のモデルをより精密・確実なものにする必要がある。そのような過程を経ることで、他言語のあいさつ表現の変遷を扱う言語普遍的なあいさつ表現変化の研究への挑戦などといった、より深く、学際的な研究が可能となる。

<引用文献>

小林 隆、澤村 美幸、ものの言いかた西東、2014

中西 太郎、朝のあいさつ表現の変遷 南九州地方の非定型表現使用地域に注目して、国語学研究、50巻、2011、203-218

中西 太郎、待遇的観点から見た日本語あいさつ表現の研究、2011

中西 太郎、東北地方のあいさつ表現の分布形成過程 朝の出会い時の表現を中心にして、東北文化研究室紀要、51巻、2009、127-144

中西 太郎、「あいさつ」における言語運用上の待遇関係把握、社会言語科学、11巻1号、2008、76-90

江端 義夫、談話・言語行動の方言地理学、方言地理学の課題、2002、329-344

學燈社、国文学解釈と教材の研究 特集 あいさつことばとコミュニケーション、44巻6号、1999

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

中西 太郎、言語行動の地理的・社会的研究 言語行動学的研究としてのあいさつ表現研究を例として、方言の研究、査読有、1号、2015、掲載確定頁未定

Taro Nakanishi、Patterns of Change in Japanese Greeting Expressions、Japanese Sociohistorical Linguistics、2016、掲載確定頁未定

中西 太郎、コミュニケーション・ギャップの一因としてのことばの地域差、明海大学大学院応用言語学研究、査読有、17巻、2015、9-15

中西 太郎、あいさつ表現の使用実態の地

域差 朝の出会い時を中心に、明海大学大学院応用言語学研究、査読有、16巻、2014、69-82

津田 智史、中西 太郎、徳島県の言語調査報告 アスペクトとあいさつ表現、徳島大学国語国文学、査読無、25巻、2012、131-162

[学会発表](計 2 件)

中西 太郎、コミュニケーション・ギャップの一因としてのことばの地域差、明海大学応用言語学セミナー、2014年11月15日、明海大学(千葉県)

中西 太郎、あいさつ表現の運用 日中のあいさつ(柳田国男没後50周年記念シンポジウム)、日本方言研究会、2012年11月2日、富山大学(富山県)

[図書](計 2 件)

小林 隆、町 博光、田島 優、中西 太郎(著者他11名、5番目)、ひつじ書房、柳田方言学の現代的意義、2014、57-75

小林 隆・中西 太郎・田附 敏尚・川越めぐみ・津田 智史・魏 ふう子・坂喜 美佳、東北大学方言研究センター、伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集、2013、18-24、355-404、567-614

[その他]

ホームページ等

<http://sinsaihougen.jp/>

伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集 宮城県沿岸15市町

6. 研究組織

(1)研究代表者

中西 太郎(NAKANISHI, Taro)

明海大学・外国語学部・講師

研究者番号：30613666

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(3)研究協力者

津田 智史(TSUDA Satoshi)

内間 早俊(UCHIMA Soushun)